つづく　つながる　夢を育てる学び舎

国立二小だより

令和６年(2024 年) ５月 31 日
国立市立国立第二小学校
校長　内田　辰彦

「常識を疑え」

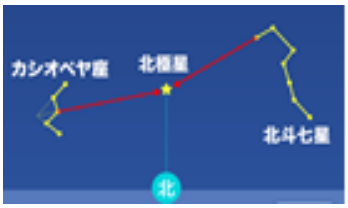
副校長　後藤　茂敦

４月より柳澤副校長の後任として赴任しました、後藤　茂敦（ごとう　しげあつ）と申します。子どもたちの健やかな成長を、笑顔と元気で支えていきます。今後ともよろしくお願いいたします。

さて、国立第二小学校では、桐朋中学・高等学校の施設をお借りして、４年生がプラネタリウムを見に行く機会があります。そこで、担当の理科（地学）の先生とやり取りする中、ある出来事を思い出しました。

それは以前、息子と「多摩六都科学館プラネタリウム」に行った時のことです。私は、スタッフの生解説が好きで、その優しい語り口についつい引き込まれてしまいます。ある時、その解説の中に、耳を疑う言葉が出てきました。

「北極星は動いている！」



そんなはずはありません。理科や歴史の教科書で習った「北極星（こぐま座のポラリス）」はいつも真北の方角で位置を変えることなく鎮座し、ＧＰＳのない昔は、航海の際の道標として、誰もが拠り所にしたはずです。今でも、夜空を見上げると、Ｗの形をした「カシオペア座」とひしゃくの形をした「北斗七星」の間に光り輝き、他のすべての星は北極星を中心に回っているように見えます。しかし、解説は以下のような内容でした。【引用　ｳｪｻﾞｰﾆｭｰｽ】

「常に位置が変わらない北極星ですが、長期的に見た場合にはそうとも言えません。たまたま現在、地球の地軸（地球の北極点と南極点とを一直線に結ぶ回転軸）の北極側をずっと延長していった位置に北極星があるため、地球がどれだけ自転してもほとんど動かないように見えます。しかし、地軸はおよそ 26000 年という長い周期で、コマが回転するときのように微妙にブレていきます。その影響により、数千年という長い目で見れば、現在の北極星の役割は、別の星へと移り変わっていきます。8000 年後には、はくちょう座の１等星『デネブ』が、12000 年後には、織姫としても有名なこと座の１等星『ベガ』が、新たに北極星の役割を就任することになります。」

まさに「目からうろこ」とはこのことでした。

2018 年にノーベル生理学・医学賞を受賞した本庶佑さんは、記者会見の際、次のような言葉を残しました。「一番重要なのは『不思議だな』という心を大切にすること。教科書に書いてあることを信じない。常に疑いをもって本当はどうなんだろうという心を大切にする。つまり、自分の目で物を見る。そして納得する。そこまで諦めない。」

常識はとても大切です。常識は社会の潤滑油の役割を果たし、常識が備わっていることで細かい説明をしなくても阿吽の呼吸で分かり合えることがあります。しかし、常識にとらわれないことが新たな発想を生み、「ボールペンは消せない」という常識とは逆の発想をした「消せるボールペン」のようなヒット商品が生まれることもあります。

社会のマナーともいえる常識を養いつつ、常識にとらわれない子どもたちの柔軟な発想を大切に育てていきます。